The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第五十七巻第二号　平成二十一年三月

日蓮聖人における法華経観
――本法三段を中心に――

山崎美由紀

一　はじめに

本論では、日蓮聖人（以下、聖人と略す）により、我々末法の凡夫が依るべき法として示された「一大秘法」を研究の視点とし、その教相面からアプローチを試みたい。それに際し『観心本尊抄』の弘通段に説かれる「五重三段」の法門（一代三段・一経三段・迹門三段・本門三段・本法三段）の中の本法三段の教判を一つの手がかりとする。(1) そもそも聖人独自の教判の中でも、「五重三段」は他の五義判や五重相対とは異なり、法華経精神の観点から一切の教法の廃立を論じ、広より略に入り略より要を取り、末法衆生の救済の要法を局限された教判であり、単に勝劣を判ずる教判ではなく、核心を求心的に求めていくという構成で、中心に至るための階梯であると見なされている。そしてその目的は、核心部分である「寿量」（正宗分）を教相的に局限し、「寿量」の本法を末法の我々凡夫に流通することにある。その「寿量」の内容を明らかにするため、以下より、まず本法三段の教判の次第を確認し、次に「寿量」の教法について論を進めたい。

二　本法三段（文底三段・法界三段・観心三段）の概要

次に聖人の遺文中の説示を辿り、その内容を具体的に確認すると『観心本尊抄』（『定遺』七一四頁）に

又於本門有序正流通。自過去大通仏ノ法華経乃至現在ノ華厳経乃至迹門十四品・涅槃経等ノ一代五十余年ノ諸経十方三世諸仏ノ微塵ノ経々ハ皆寿量ノ序分也。自一品二半之外ハ名小乗教・邪教・未得道教・覆相教。論スレハ其機ヲ徳薄垢重幼稚貧窮孤露ニシテ同禽獣ニ也。爾前迹門ノ円教スラ尚非仏因。何況ヤ大日経等ノ諸小乗経ヲヤ。何況ヤ華厳・真言等ノ七宗等ノ論師人師ノ宗ヲヤ。与テ論スレハ之ヲ不レ出テ前三教ヲ。奪テ云ヘハ之ヲ同ス蔵通。設ヒ法ハ称ストモ甚深ト未タ論セ種熟脱ヲ。還テ同シ灰断。化ニ無シトハ始終是也。譬ヘハ如シ雖レ為タリト王女懐妊スレハ畜種其子尚劣レルカ中旃陀羅ニ。此等ハ且ク閣レ之ヲ。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

と説かれる。即ち、本門においても序・正宗・流通に分けることが説かれ、そして過去世三千塵点劫の大通智勝仏の時代に説かれた法華経から釈尊一代五十余年に説かれた全ての諸経、また十方に亘る空間世界と現在・過去・未来の時間世界に遍満する諸仏が説かれた無数の経々これら全ての経典、即ち三世十方に亘る一切の教法が全て序分であり、「寿量」を正宗分とすると示される。ここでいう「本門」・「寿量」・「一品二半」の語彙は聖人独自の意義を有することに注意しなければならず、本門三段の「本門」は爾前・迹門に相対する「本門」を意味し、ここでいう「本門」は寿量品の発迹顕本によって詮顕された「観心の本門」の意味である。(2)

次に、「寿量」について約教の観点から説かれる。即ち「一品二半」のみが仏因であると示される。同様に、ここでいう「一品二半」は本門三段の正宗である「一品二半」(涌出品後半・寿量品・功徳品前半)とは異なり、「寿量」と同意に受取れ、実質的な寿量品全体を指し、釈尊の久遠実成と聞法の利益が説かれるのである。「寿量」を能顕の側面から「一品二半」と表現する。「寿量」と「一品二半」と同意とするのは、内証・文底の義で、教相上の所談でないことを示すもので、広開近顕遠が説かれる寿量品の一品に、前後の二半を包摂するから「寿量」と表現するのである。『十章抄』の「爾前は迹門の依義判文、迹門は本門の依義判文なり。但真実の依文判義は本門に限ルべし。」(『定遺』四八九頁)、及び『開目抄』の「寿量の一品の大切なるこれなり」(『定遺』五七六頁)の文から推測されるように、「寿量」と「一品二半」が矛盾無く会通されるのである。(3)

次に、「寿量」について約機・約時の観点から説かれる。即ち、正宗以外の教には仏種の義が無いことを明かし、更にこの正宗に化の始終を論じることによって、「時の至れるゆへ」(『定遺』一〇〇四頁)に「寿量」が仏種の義を成ずることを明かされる。(4)

三 「寿量」の概念

現代における『観心本尊抄』の主な研究書及び解説書等を参考にこれまでの「寿量」の解釈を整理すると、「寿量」の概念として以下の三つの側面から表現することが出来る。

〈一〉「内証の寿量品」

『観心本尊抄』に「所詮迹化・他方ノ大菩薩等ニ以テ我内証ノ寿量品ヲ不レ可ニ授与一ス。末法ノ初ハ謗法ノ国 悪機ナル故ニ止メ之ヲ召テ地涌千界ノ大菩薩ヲ寿量品ノ肝心タル以テ妙法蓮華経ノ五字ヲ令メタマフレ授ニ与セ閻浮ノ衆生ニ也。」(『定遺』七一五~七一六頁)とあることに基づく。即ち、「内証の寿量品」とは、釈尊の内心に証得された本門寿量品のことで、次の文に出てくる「寿量品ノ肝心タル妙法蓮華経ノ五字」とその法体は同じである。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

これらの違いについては、望月歓厚博士が『観心本尊抄講義』（三一五頁）に解説しており、迹化他方への否定については在世の本法に約して「内証の寿量品」といい、本化への付嘱には末法の本法に約して「妙法蓮華経の五字」といっている。ここで注意しなければならない点は、その内証があくまでも久遠実成の教主釈尊の内証である点で、「寿量品」とあるのは、どこまでも法華経本門の経文に即した本法であるということである。よって「寿量」とは「内証の寿量品」であると確認できる。

〈二〉**文底観心（本門観心）・文底本門の寿量品**

前述した様に日蓮教学における本門の概念には多面性が認められる。ここでも、先師によって、文上本門（法華経本門十四品）と、聖人独自の立義である文底本門・観心本門の二種に分ける解釈がなされている。これは、『開目抄』の「一念三千の法門は但法華経の本門寿量品の文の底にしづめたり」（『定遺』五三九頁）の文に依るもので、文上とは文に表された釈尊の表意、文底とは文を通した釈尊の深秘の義意で寿量品に説き顕された釈尊の意とされる。これを五重三段に配すると、【四】本門三段は文上本門についての判釈、【五】本法三段は文底本門・観心本門についての教判であるといえるであろう。このことは教に約し所詮に約して、本法三段を文底三段・観心三段という事からも確認できる。故に「寿量」とは「文底観心・文底本門の寿量品」であると確認できる。

〈三〉**文底一品二半**

前述したように、「寿量」と「一品二半」は同意だが、【四】本門三段（文上本門の判釈）の正宗分も一品二半なので、ここで言う「一品二半」は文底一品二半の意であるということである。[5] このような主体的な法華経の受けとめ方は『法華取要抄』にも見られ「寿量品ノ一品二半ハ自リ始レ至マテ二于終ニ一正ク為ナリ二滅後ノ衆生一。滅後之中ニハ末法今時ノ日蓮等カ為也。」（『定遺』八一四頁）と述べられる。故に【五】本法三段の正宗分である「寿量」とは「文底の一品二半」であると確認できる。

次に、遺文中から「寿量」の説示を全て検索し整理すると、ⓘ「寿量品」（『定遺』九五頁他多数）、ⓘⓘ「寿量仏」（『定遺』七一三頁）・「寿量の仏」（『定遺』五五二頁）、「寿量品の仏」（『定遺』五七六・五七八・七四三・八二〇頁・二九三八頁）、ⓘⓘⓘ「寿量の一品」（『定遺』五五五・五七六頁）、ⓘⓥ「寿量ノ法門」（『定遺』七一六頁）、ⓥ「寿量」[6] を挙げることが出来る。今これを検討すると、ⓘ「寿量品」・「寿量の一品」は寿量品第十六のことで、ⓘⓘ「寿量（品）の仏」とは、法華経本門寿量品に開顕された久遠の教主釈尊をいい、ⓘⓘⓘ「寿量の一品」とは真の久遠開顕は寿量品に限られることをいう。ⓘⓥ「寿量の法門」とは寿量品の開近顕遠の法門の事を指し、ⓥ遺文中でもただ一箇所のみの説示である「寿量」は、本法三段の正宗分として明

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

らかにされたものである。先行研究による概念をまとめると、「寿量」は、〈一〉「内証の寿量品」、〈二〉「文底観心・文底本門の寿量品」の概念を有するもので、〈三〉「文底一品二半」と表現できることを知る。

四　おわりに

以上、聖人の本法三段における「寿量」（正宗分）の概念を検討し、「一大秘法」について教相面を中心とした理解を試みた。つまり「五重三段」をまとめる本法三段は、「寿量」が一切の教法を集約し、包摂する究極の教相であるということが確認できる。そして、ここでいう「本門」・「寿量」・「一品二半」には聖人独自の概念があることも理解される。即ち、「寿量」と「一品二半」が同意であること、更にこの「寿量」と「一品二半」以外の教を、約教の上から小乗教・邪教・未得道教・覆相教と斥け、約機の上からは「同禽獣」であると判断し、種熟脱に及んでは正宗以外の教に仏種の義が無いことを明かされたのである。即ち、本法三段の正宗を明かす過程において、約教・約機・約時という複雑な契機を内包していることが示されているのである。

更に先行研究をまとめ、「寿量」の解釈について三つの側面から具体的に示してきた。そして「寿量」とは、文上教相の寿量品ではなく、内証・文底・観心の寿量品であって、文底一品二半の解釈を用いることによって、更に「寿量」の理解を深められたと思う。

1　小稿「日蓮聖人における五重三段の一考察」（『日蓮教学研究所紀要』三五号、五六～六四頁）参照。
2　北川前肇著『日蓮教学研究』（一九八七年、平楽寺書店）二八七～二九二頁。
3　茂田井教亨著『日蓮教学の根本問題』（一九八三年、平楽寺書店）九二頁。
4　同九三頁。
5　清水龍山著『日蓮聖人遺文全集講義』第一一巻下、三二五頁及び『日蓮聖人遺文辞典』七五頁「一品二半」の項を参照。
6　『定遺』七一四頁。他に『法華真言勝劣事』に一箇所（『定遺』三〇七頁）あるが、これは『大日経義釈』巻九（『続天台宗全書』四四六頁b）、『大日経疏』巻一二（『正蔵』三九巻七〇九頁）からの引用である。

〈キーワード〉鎌倉時代、日蓮教学、日蓮、『観心本尊抄』、本法三段、五重三段、寿量

（立正大学大学院博士課程）

NII-Electronic Library Service